

日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義の検討

著者	明野 伸次
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	12
号	1
ページ	67-72
発行年	2016-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00010462/

[総説]

日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義の検討

明野 伸次

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

キーワード

看護技術, タッチ, 触れる, 安楽, 身体性

I. 緒言

看護師の実践的行為の先端はその触れる「手」にある。看護師の手は、脈拍や血圧を測る、身体を拭く、体の向きを変えるなど頻繁に用いられ、日常的に対象者の身体に直接触れている。この看護師の手が直接対象者に触れるという看護技術の特性については、1970年代以降タッチというテーマで探求されている。タッチに関する文献を概観すると、タッチは援助や行為を遂行するのに必要なタッチと、必ずしも援助や行為に必要なではないタッチに分類される(Routasalo, 1999; 牛坊・渡辺, 2006)。援助や行為を遂行するのに必要なタッチは、バイタルサインの測定や基本的な生活行動の援助に伴う手の接触を指し、必ずしも援助や行為に必要なではないタッチは、セラピューティックタッチに代表されるような対象者の心理・身体面に影響をもたらすことを目的とした手の接触を指す。よって、タッチは分類と目的から考えると、「日常的な看護行為に伴うタッチ」と「対象者の心理・身体面に影響をもたらす意図的なタッチ」に分けられる。

「対象者の心理・身体面に影響をもたらす意図的なタッチ」に関しては、セラピューティックタッチ(笠原・柳・小板橋, 2006; 若土・岡本・長谷部, 2008)や、タクティールケア(新開・濱田・伊藤・鬼木・皆越・甲斐田, 2010; 吉永・金井・仁宮・上野, 2011)など補完療法の一つとして提案されているもの、母子看護領域におけるタッチケア(布施・小澤・鈴木・平田・岡島・畠山, 2011; 大森, 2009)など、様々な方法の開発と効果の検証がされている。一方で「日常的な看護行為に伴うタッチ」に焦点を当てた研究は極めて少ないのが現状である。これは、あまりにも日常的であり治療的価値はないことや、日常的な看護行為においては触れることが第一義的な目的ではないため、触れることを意識し難いためといわれている(川西, 2003; 牛坊・渡辺, 2006)。しかし、看護師が対象者

と触れる場面は、清拭や洗髪、寝衣交換、移動移乗の援助などの日常的な看護行為によるものが最も多く(浅井・田上・沼本・西田・高田, 2002; 江口・西片, 2005)、タッチ全体に占める割合は8割以上であるという報告や(Oliver・Redfern, 1991)、意図的なタッチと比較して3倍以上多いという報告もある(Schoenhofer, 1989)。以上から、日常的な看護行為における手の接触が、対象者に何らかの影響を与えていることは想像に難くない。そこで、本稿では国内外の文献を概観し、日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義を検討する。本稿で検討される知見は、看護師が自らの身体を使って対象者の身体に働きかけるという看護技術における特性の探求となり、対象者の安楽さを保証するための看護技術の基礎的研究になるものと考えられる。

II. 用語の定義

日常的な看護行為：日本看護科学学会看護学術用語検討委員会(2005)の看護行為用語の定義を参考に、バイタルサインの測定などの「観察・モニタリング」、清潔、整容、食事、排泄援助などの「基本的生活行動の援助」、与薬や創の管理などの「医療処置の実施・管理」とする。

III. 目的

日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義を明らかにし、看護師が自らの身体を使って対象者の身体に働きかけるという看護技術における特性の探求と今後の課題を検討する。

IV. 方法

1. 文献選定の手順

国内文献については、医学中央雑誌 Web 版 ver.5 を用いて、遡及可能な全期間を対象として検索した。検索キーワードは「看護」and「タッチ」or「タッチング」or「触れる」とした。さらに、研究目的や方法、結果の内容が記述されている文献を選定するため、原著論文、抄録ありで絞り込み、分類を看護とした。その結果476件の文献が検索された。

<連絡先>

明野 伸次

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

E-mail: akeno@hoku-iryu-u. ac. jp

海外文献については、CINAHLWeb版を用いて、遡及可能な全期間を対象として検索した。検索キーワードは、「nursing」and「touch」と、日常的な看護行為に伴う手の接触を示すワードの「task」「working」「instrument」「procedural」「functional」(Routasalo, 1999)および「nontherapeutic」をorでつないだ。さらに、研究目的や方法、結果の内容が記述されている文献を選定するため、査読あり、抄録ありで絞り込み、対象に関しては18歳以上の人間とした。その結果174件の文献が検索された。

以上の文献から、タクティールケア、セラピューティックタッチ、ヒーリングタッチ、マッサージ、指圧、母子看護領のタッチケアなどの意図的なタッチを扱っているものは除き、日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義について言及している文献を選定した。その結果、最終的に国内文献5件、海外文献5件の10文献が選定された。

2. 分析方法

文献はGarrard (2012)の文献レビューの方法を参考に、著者、出版年、研究目的、研究デザイン、研究方法、結果および考察についてマトリックス方式でまとめた。結果および考察のトピックは、日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義について言及している内容を抽出した。表にまとめた内容から、日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義を検討した。

Ⅲ. 結果

日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義に関する研究の概要を、表1に示す。表にまとめた内容から、日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義は、「1. 不安や緊張の軽減」「2. 快適さの促進」「3. 看護師の関心の伝達」があげられた。

1. 不安や緊張の軽減

日常的な看護行為に伴う手の接触は対象者に「不安や緊張の軽減」をもたらすことが示唆された。結城他(2003)は、術前の患者に対するタッチとして、仰臥位から側臥位への体位変換やストレッチャーへ移動するための介助、手術台への移動の介助などがみられ、これらのタッチは術前患者の不安を有意に軽減させる効果があることを示した。川西(2005)は、整形外科の看護師が患者に生活行動援助技術を提供する場面の観察から、看護師は患者の身体を仰臥位から側臥位に動かすという身体の動きを支えるだけでなく、身体の動きに伴う痛みへの恐れを支えていると述べている。Weiss(1990)は、患者を6つの群に分けて脈拍、血圧、不安尺度の測定を行った。6つの群は、①健康状

態(ストレス)を話す、②血圧、脈拍測定と、手や顔を触る(軽いタッチ)、③手、足、頭部、顔などのマッサージ(神経伝達に影響するタッチ)、④血圧、脈拍を測定する、⑤手や顔を触る(軽いタッチ)、⑥楽しいことを話す、である。その結果、②～⑤の身体に触れる群は、①と⑥の会話をするだけの群と比較して、脈拍数と拡張期血圧が有意に低下した。さらに、②～⑤の群間における脈拍数や血圧値の有意な差はなかった。つまり、血圧・脈拍測定における手の接触は、マッサージや軽いタッチと同様に、交感神経活動の低下をもたらす可能性を示した。一方で、Glick(1986)は、血圧や脈拍測定などの特定の任務を遂行するためのタッチと、手を握るなど業務と関連せず手または腕が対象者と接触する意識的なタッチをうけた各群の不安を測定した。その結果、各群の不安の得点の変化および群間における不安の得点に有意な差はなかった。よって、どちらのタッチも不安の軽減をもたらしたとは判断できないが、不安を軽減させる効果に差はなかった。

2. 快適さの促進

日常的な看護行為に伴う手の接触は対象者に「快適さの促進」をもたらすことが示唆された。Estabrooks(1989)は、集中治療室における看護師の関わり場面から、脈をとるなどの仕事上のタッチと他のタッチとの違いは、必ずしなければならないことであり、本質的には感情に動かされないタッチであるが、快適さをもたらすことができると述べている。そして、患者への効果は、看護師が手順の中で仕事上のタッチを使うその使い方に影響を受けるとした。Vortherms(1991)は、高齢者に対する看護師の関わり場面から、股関節手術を受けた患者を移動することのような痛みを伴う行為でさえ、看護師が行為の間、患者にタッチする方法によって、快適さを提供できると述べている。柴田ら(2002)は、看護場面の観察と記述から、側臥位にして支えるなどの「援助・処置遂行のためのタッチ」は、看護婦自身の行為目的を達するためのタッチでそれ以上ではないものと、必然的なタッチ以上の意味を持つと思われるものに分けられると述べている。これらは、何らかの援助・処置を行う際に、患者への満足感や安楽への配慮がみてとれるかによって区別された。つまり、その触れ方によっては「援助・処置遂行のためのタッチ」に止まらず、技術の的確さによって一層患者に満足感を与えると述べている。佐藤ら(2006)は、入院患者を対象にタッチを伴う看護場面の感じ方(快-不快)を調査した。その結果、血圧測定などの処置目的のタッチの評価点は、他のタッチと比較して低かったものの、清拭などの身体の清潔援助のタッチの評価点は、励まして身体を触るなどの挨拶と確認のタッチと有意差はなかった。つ

表1 日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義に関する研究の概要

著者 (発行年)	研究目的	研究デザイン/研究方法	結果/考察：日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義
Glick M. S (1986)	ケアリングタッチが患者の不安を軽減させる効果があるかを明らかにする	準実験研究/心筋梗塞の患者を対象に、手を握り言葉をかけたタッチ群15名と血圧、脈拍を測り言葉をかけた procedural touch (仕事上のタッチ) 群18名の不安の程度を STAI を用いて測定した	血圧と脈拍測定 procedural touch (仕事上のタッチ) をされた群と、意識的に患者の手を握るまたは腕が接触するタッチを受けた群の2群間において不安の得点に有意な差はなかった。また、各群の不安の得点の変化にも有意な差はなかった
Estabrooks C. A (1989)	集中治療室におけるタッチの要素を明らかにする	質的研究/看護師8名を対象に、集中治療室における看護場面の参加観察とインタビューを行った	脈をとるなどの task touch (仕事のタッチ) と他のタッチとの違いは、必ずしなけれはならないことであり、本質的には感情に動かされないタッチであるが、快適さをもたらしことができ、患者の効果は、看護師が手順の中でタッチを使うその使い方に影響を受ける
Weiss S. J (1990)	心疾患患者へのタッチの効果循環器の反応と不安の測定によって明らかにする	準実験研究/56人の患者を以下に分けて、脈拍、血圧、不安尺度の測定を行った。①健康状態(ストレス)を話す、②血圧、脈拍測定と、軽いタッチ、③マッサージ、④血圧、脈拍を測定する、⑤軽いタッチ、⑥楽しいことを話す	脈拍数と拡張期血圧は、②～⑤の触れる群の方が、①⑥の話す群に比べ程度に少なかつた(低かつた)、②～⑤には有意差はなかった、不整脈の発生頻度および収縮期血圧には有意差はなかった、不安尺度に関して有意差はなかったが、性別で比較すると男性の方が女性に比べ有意に不安が低下した
Vortherms R. C (1991)	高齢者へのタッチの適切な使用方法を提案する	質的研究/高齢者を対象に、タッチを含んだコミュニケーション場面の参加観察を行い記録した	入浴や歩行介助などの functional touch (機能的タッチ) は、穏やかで安定し注意深い場合、思いやりや関心を伝達する。逆に、せつちで乱暴な場合、嫌悪や苛立ちと軽蔑を伝達する、痛みを伴う行為(股関節手術を受けた患者を移動することのよう)な) できえ、患者にタッチにより快適さを提供する
Bottorff, J. L. Morse, J. M (1993)	がん患者を看護している看護師が行うタッチのタイプと意味を明らかにする	質的研究/がん患者8名と看護師32名の看護場面をビデオ撮影し、タッチのタイプを分類した。また、看護師のタッチについて患者にインタビューした	患者は、working touch (患者の世話をする時のタッチ) の優しさ、完全さ、確実性によって看護師のケアと看護師の関心を評価していた、看護師も同様に、これらのタッチの方法は、患者に対する関心を伝達すると思うと述べ、working touch がコンフォートに重要であると認めた
柴田・仁平・登喜・高橋・高田 (2002)	タッチのもつ意味を記述すること、さらに患者状態や看護婦の経験など場面特性との関連を探る	質的研究(グラウンデッドセオリーアプローチ)/看護師24名と患者21名を対象に、看護場面の観察・記述と、タッチに関連する簡単なインタビューを行った	背部清拭の際に側臥位にして支えるなどの「援助・処置遂行のためのタッチ」は、看護婦自身の行為目的を達するためのタッチでそれ以上ではないものと、必然的なタッチ以上上の意味を持つと思われるものに分かれた。洗髪に伴って必要となるタッチであるが、手技の熟達や短時間でなされることが患者に快の感覚をもたらし、満足感を与えている
鳥谷・矢野・菊地・小島・菅原 (2002)	緩和ケア病棟で行われているタッチのタイプを明らかにし、文脈の中でタッチがどのような意味を持っているのかを明らかにする	質的研究/看護師10名と患者3名を対象に、ケアを提供している場面への参加観察と、看護師にタッチ場面図等について半構成的インタビューを行った	「処置を目的としたタッチ」「安全を守るタッチ」「患者の自立を支援するタッチ」には患者の世話をする時のタッチと共通する点があるが、これらの中にも処置を行うと同時に看護者の思いや関心を強く持つタッチがみられた
結城・竹内・比嘉 (2003)	タッチが手術前患者の心理に及ぼす影響と、看護者にとつてのタッチの意味と手術前患者のタッチの意味を明らかにする	質的・量的研究/開腹手術を行う患者6名を対象に、全身麻酔導入までの間の参加観察と、術前の患者心理に関する質問紙調査を術後に行った	「仰臥位から側臥位への体位変換」「ストレッチャーへ移動するための介助」「肩を支える」「手術台への移動の介助」などのタッチがみられ、タッチは術前患者の不安を軽減させる効果がある
川西 (2005)	整形外科看護師が患者に生活行動援助技術を提供する際に行われる「触れる」という行為に焦点を当てて、「触れる」ことの意味を明らかにする	質的研究/看護師3名と患者4名を対象に、生活行動援助を実施する場面への参加観察と、触れ方の意図(看護師)や触れた時の印象(患者)について半構成的面接を行った	「行動に手を添える」ことを意図した行為の意義について、身体を仰臥位から側臥位に動かすという身体の動きを支えるだけでなく、身体の動きに伴う痛みへの恐れを支える。一方では、看護師の触れ方によって患者は「この看護師は面倒くさいか」と思っているのか」と受けとめる場合もある
佐藤・三浦・福士・小野・斉藤 (2006)	看護師に触れられることを患者の認識の観点から分析する	量的研究(相関的研究)/入院患者168名を対象に、タッチを伴う27の看護場面の感じ方を5段階で質問紙により回答を求めた。5段階の評価を点数化し因子分析を行った	「1. 処置目的のタッチ(バイタル測定など)」「2. 苦痛の緩和のタッチ(痛みのある時にさすってもらうなど)」「3. 身体清潔援助のタッチ(清拭など)」「4. 挨拶と確認のタッチ(励まして身体を触るなど)」の4因子が抽出された。各因子における評価点の平均は(快い)5点、不快)1点、1は3.33点、2は3.98点、3は3.70点、4は3.69点であった

まり、励まして身体を触るなど対象者の心理面に影響をもたらすことを目的としたタッチと、身体の清潔援助による手の接触に対する感じ方に差はなかった。

3. 看護師の関心の伝達

日常的な看護行為に伴う手の接触は対象者に「看護師の関心の伝達」をもたらすことが示唆された。Vortherms (1991) は、高齢者に対する看護師の関わり場面から、入浴や歩行介助などの機能的なタッチは、穏やかで安定し注意深い場合、思いやりや関心を伝達する。逆に、せっかちで乱暴な場合、嫌悪や苛立ちと軽蔑を伝達すると述べている。Bottorffら (1993) は、がん患者と看護師との看護場面から、患者は、患者の世話をする時のタッチの優しさ、完全さ、確実性によって看護師のケアと看護師の関心を評価していたと述べている。鳥谷ら (2002) は、緩和ケア病棟においてケアを提供している場面から、処理を目的としたタッチや安全を守るタッチ、患者の自立を支援するタッチには、患者の世話をする時のタッチと共通する点があるが、これらの中にも処置を行うと同時に看護者の思いや関心を強く持つタッチがみられたことを示した。川西 (2005) は、整形外科の看護師が患者に生活行動援助技術を提供する場面の観察から、看護師の触れ方によって患者は「この看護師は面倒くさいと思っているのか」と受けとる場合もあると述べている。

IV. 考察

結果から、日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義は「不安や緊張の軽減」「快適さの促進」「看護師の関心の伝達」が明らかとなった。考察では、これらの意義から、看護師が自らの身体を使って対象者の身体に働きかけるという看護技術における特性の探求と今後の課題を検討する。

1. 日常的な看護行為に伴う手の接触が意図的なタッチと同様の効果をもたらす可能性

日常的な看護行為に伴う手の接触は対象者に「不安や緊張の軽減」と「快適さの促進」をもたらすことが明らかとなった。この結果は、日常的な看護行為に伴う手の接触が、対象者の心理・身体面に影響をもたらす意図的なタッチと同様の効果をもたらす可能性を示している。意図的なタッチの効果は、タクティールケアやマッサージなどの補完療法として検証されているだけでなく、何気ない会話の中で対象者の肩や背中に触れることによって、不安やストレスを軽減させることや (浅見・大田, 2010; 金子・小板橋, 2006; 鈴木・加藤, 2007)、爽快感を高めること (加悦・井上, 2007)、自尊心や幸福感、生活満足感などを高めることが報告されている (Butts, 2001)。ただし、日常的な看護行為に伴う手の接触がこれらの効果をもたらす

ためには、その手の使い方が影響することが結果から示唆されている。柴田ら (2002) は、洗髪における看護師の熟達した頭の支え方や洗い方が患者に快の感覚をもたらしていることから、洗髪が単に清潔の保持を目的とした援助にとどまらなると述べている。つまり、対象者の頭を支える看護師の手の使い方によっては、快適さを提供できるのである。しかし、このような手の使い方の体現は、初学者にとって困難であることが明らかになっている (明野, 2010)。例えば、初学者である学生は、臥床している患者のシーツ交換において対象者の肩甲骨や腰部を指で掴んで体幹の下にあるシーツを引き出す傾向にあった (明野, 2011)。一方、看護師は対象者の肩甲骨や腰部に両手を使い自らの手掌を差し込む隙間を作りながら体幹の下に手掌を差し入れ、その隙間からシーツを引き出していた (明野・平・鹿内・伊藤・花岡, 2008)。つまり学生は、その手で対象者に与える安楽さを考慮して身体を扱うことができず、シーツ交換の技術が単にシーツのみを扱っている結果となり、対象者の安楽さを阻害していると考えられた。以上から、対象者の安楽さを保証するための看護技術を構築するためには、どのような手の使い方が対象者にとって安楽であるかを客観的に示す必要と、その手の使い方を教授するための取り組みが求められているといえる。

2. 日常的な看護行為に伴う手の接触による感情の相互作用

日常的な看護行為に伴う手の接触は対象者に「看護師の関心の伝達」をもたらすことが明らかとなった。この結果は、日常的な看護行為に伴う手の接触が、看護師と対象者との感情の相互作用をもたらすことを示している。吾妻 (2001) は、人による人に対する技術には、相互身体的な関係が必要であり、相互身体的な関係とは、お互いの身体を通じて知覚された体験が交換され、同一知覚となって体験されることによって相手の状況が分かることであると述べている。また、池川 (1991) は、看護者と患者との相互身体的な関わりを学ぶことを通じて、学生は看護の受け手である患者のみならず、学生自身が知覚すると同時に知覚されるものとして、私という看護者の身体性を確かなものとして実感できるように成長していくのであると述べている。すなわち、看護技術には、看護師と対象者との感覚の相互性が内包されており、加えて、この相互性は触れるという行為において立ち現れやすいことを示している。そして、看護師の手は対象者に触れると同時に対象者に触れられる手となり、両者の間には何らかの感情や意味が伝えられ、感情の相互作用が生じるのである。つまり、日常的な看護行為は、その手の接触による身体感覚から対象者の感情や反応を確認するとともに、対象者に与える安楽さを考慮した身体への

働きかけを実施できてはじめて、看護技術としての意味を発するのである。昨今、医療現場のIT化により、高度の医療機器の操作や、出力された客観的なデータの解釈が優先される傾向が強まり、患者に触れない看護が広まってきた(川島, 2011; 山口, 2009)。これは五感で直接患者情報を得るのとは全く異なり、直接身体に触れる伝統的な看護とは対照的な新しい種類の手を出さない看護をもたらしっていると指摘されている(マーガレット・サンデロウスキー, 2004)。以上のような、対象者に手を出さない看護の広まりは、看護師が自らの身体を使って対象者の身体に触れるという看護技術の特性が失われる懸念がある。だからこそ、最も密接に対象者に触れる日常的な看護行為における手の使い方の特異性と価値について再考し、看護師の手の有用性を検証することが求められているといえる。

IV. 結語

日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義に着目して国内外の文献を概観し、看護師が自らの身体を使って対象者の身体に働きかけるという看護技術における特性の探求と今後の課題を検討した。その結果、日常的な看護行為に伴う手の接触が対象者にもたらす意義として「不安や緊張の軽減」「快適さの促進」「看護師の関心の伝達」が明らかとなった。

日常的な看護行為に伴う手の接触は、その手の使い方の次第で意図的なタッチと同様の効果をもたらす可能性が示唆された。よって、どのような手の使い方が対象者にとって安楽であるかを客観的に示す必要と、その手の使い方を教授するための取り組みが求められていると考えられた。また、日常的な看護行為は、その手の接触による身体感覚から対象者の感情や反応を確認するとともに、対象者に与える安楽さを考慮した身体への働きかけを実施できてはじめて、看護技術としての意味を発すると考えられた。以上から、最も密接に対象者に触れる日常的な看護行為における手の使い方の特異性と価値について再考し、看護師の手の有用性を検証することが求められているといえる。

本研究の一部は、日本看護技術学会第12回学術集会で発表した。なお、本研究は文部科学省科学研究費補助金(若手 B24792409)によって行った研究の一部である。

文献

明野伸次 (2010). 血圧測定技術における学生の行為の特徴－身体性、順序性の観点から－. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 6(1), 63-69.

明野伸次 (2011). リネンチェンジにおける学生の行為の特徴－身体性、順序性の観点から－. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 7(1), 71-78.

明野伸次, 平典子, 鹿内あずさ, 伊藤祐紀子, 花岡眞佐子 (2008). 看護技術における行為の構造化(第5報)－リネンチェンジにおける身体性、順序性の特徴－. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 4(1), 91-97.

浅井さおり, 田上明日香, 沼本教子, 西田真寿美, 高田早苗 (2002). 介護老人保健施設での看護場面におけるタッチの特徴. 老年看護学, 7(1), 70-78.

浅見京子, 大田博 (2010). タッチングの有効性に関する研究 自身の看護実践場面を分析して. 看護実践の科学, 35(3), 68-72.

吾妻知美 (2001). 基礎看護学実習における看護技術教育の方法論的考察 患者－学生の相互身体的な関わりを中心に－. 日本赤十字看護大学紀要, 15, 11-22.

Bottorff, J. L., Morse, J. M (1993). The use and meaning of touch in caring for patients with cancer. *Oncology Nursing Forum*, 20(10), 1531-1538.

Butts, J. B (2001). Outcomes of comfort touch in institutionalized elderly female residents. *Geriatric Nursing*, 22(4), 180-184.

江口保子, 西片久美子 (2005). 援助者のタッチによる痴呆性高齢者の反応. 日本赤十字看護学会誌, 5(1), 117-123.

Estabrooks, C. A (1989). Touch : a nursing strategy in the intensive care unit. *Heart & Lung*, 18(4), 392-401.

布施和枝, 小澤未緒, 鈴木智恵子, 平田貴子, 岡島有希, 畠山真由子 (2011). タッチケアが早産体験をした母親の心理状態に及ぼす影響に関する臨床研究 NICU・GCU からの子どもの退院を控えた母親を対象に. *小児保健研究*, 70(6), 731-736.

Garrard, Judith (1999) / 阿部陽子 (2012). 看護研究のための文献レビュー－マトリックス方式(第1版). 81-102, 医学書院, 東京.

Glick, M. S (1986). Caring touch and anxiety in myocardial infarction patients in the intermediate cardiac care unit. *Intensive Care Nursing*, 2(2), 61-66.

牛坊恭子, 渡辺岸子 (2006). 看護におけるタッチのあり方－文献検討と今後の課題－. *新潟大学医学部保健学科紀要*, 8(2), 123-136.

池川清子 (1991). 看護 生きられる世界の実践知. 97-107, ゆみる出版, 東京.

金子有紀子, 小坂橋喜久代 (2006). 【補完代替医療における看護療法の検証】健康女性への意図的タッチによって引き起こされる生理的・情緒的反応. *看護研究*, 39(6), 469-480.

加悦美恵, 井上範江 (2007). 苦痛を伴う検査時の看護師の関わり：話しかけると介入と話しかけながら

タッチする介入の対比. 日本看護科学学会誌, 8(2), 46-55.

笠原久美子, 柳奈津子, 小板橋喜久代 (2006). Therapeutic touchによる生理的反応と主観的反応に関する基礎的研究. 看護研究, 39(6), 481-489.

川西美佐 (2003). 看護技術における身体性. 日本赤十字広島看護大学紀要, 3, 9-17.

川西美佐 (2005). 看護技術における「触れる」ことの意義 - 整形外科看護師の生活行動援助技術を身体性の観点から探究して -. 日本赤十字広島看護大学紀要, 5, 11-19.

川島みどり (2011). 触れる・癒やす・あいだをつなぐ手 TE-ARTE学入門. 2-22, 看護の科学社, 東京.

日本看護科学学会 看護学学術用語検討委員会 (編) (2005). 看護行為用語分類. 30-46, 日本看護協会出版会, 東京.

Oliver, S, Redfern, S. J (1991). Interpersonal communication between nurses and elderly patients: refinement of an observation schedule.. Journal Of Advanced Nursing, 16, 30-38.

大森裕子 (2009). 障害児へのタッチケアがその母親に及ぼす影響. 甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編, 2, 35-45.

サンデロウスキー, マーガレット (2000) / 和泉成子 (2004). 戦略と願望 - テクノロジーと看護のアイデンティティ (第1版). 76, 岩波新書, 東京.

佐藤育実, 三浦和, 福士理沙子, 小野晃子, 齊藤美紀子 (2006). 看護場面でのタッチに対する患者の認識. 日本看護学会論文集: 看護総合, 37, 322-324.

Schoenhofer, S. O (1989). Affectional touch in critical care nursing: a descriptive study. Hart & Lung, 8(2), 146-54.

柴田しおり, 仁平雅子, 登喜和江, 高橋千恵子, 高田早苗 (2002). 日常看護場面における看護婦患者間のタッチの意味とそのタイプに関する研究. 神戸市看護大学紀要, 6, 29-40.

新開孝子, 濱田洋太, 伊藤康裕, 鬼木清美, 皆越美香, 甲斐田廣隆 (2010). 認知症高齢者に対するタクティールのケアのリラクセス効果の有効性 認知症患者とのかかわりを考える. 日本精神科看護学会誌, 53(3), 80-84.

鈴木七重, 加藤千賀子 (2007). 意識下で手術を受ける患者に対するタッチングの効果. 日本手術医学会誌, 28(2), 121-123.

鳥谷めぐみ, 矢野理香, 菊地美香, 小島悦子, 菅原邦子 (2002). 緩和ケア病棟に入院中のがん患者の看護場面におけるタッチの研究. 天使大学紀要, 2, 13-23.

Vortherms, R. C (1991). Clinically improving communication through touch. Journal Of Geron-

tological Nursing, 17(5), 6-10.

若土栄子, 岡本万紀子, 長谷部玲子 (2008). デュシェンヌ型筋ジストロフィー児に癒しの看護ケアを試みる セラピューティックタッチの効果. 日本看護学会論文集: 小児看護, 38, 293-295.

Weiss, S. J (1990). Effects of differential touch on nervous system arousal of patients recovering from cardiac disease. Heart & Lung, 19(5), 474-480.

山口創 (2009). 「触れる」を科学する 看護の原点として「ふれる」を見直す. 看護実践の科学, 34(13), 74-77.

吉永奈央, 金井智子, 仁宮依都佳, 上野陽子 (2011). 大腿骨頸部骨折患者のせん妄予防に対するタクティールケアの有効性の検証 認知症の有無による比較. 日本看護学会論文集: 老年看護, 41, 141-143.

結城藍, 竹内登美子, 比嘉肖江 (2003). 開腹術を受ける患者に対する全身麻酔導入までの意図的タッチの効果. 臨床看護, 29(4), 565-582.

受付: 2015年11月30日

受理: 2016年2月26日